

新約聖書 ルカによる福音書 15章 1節—3節と 11節 b—32節（新共同訳）

¹徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。²すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。³そこで、イエスは次のたとえを話された。

^{11b}「ある人に息子が二人いた。¹²弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。¹³何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。

¹⁴何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。¹⁵それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。¹⁶彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。¹⁷

そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。¹⁸ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。¹⁹もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。』²⁰そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。²¹息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』²²しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。²³それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。

²⁴この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

²⁵ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。²⁶そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。²⁷僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』²⁸兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。²⁹しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。³⁰ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』³¹すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。³²だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しむのは当たり前ではないか。』」

説教「二人の息子の父」

電気技術の発展に多大な貢献をしたニコラ・テスラはこう述べています。「あなたの憎しみを電気に変換してしまいなさい。そうすれば世界全体が明るくなる」。

この世の中には、ありとあらゆる種類の憎しみが 있습니다。国家間の争いといった大規模なものから、隣人や家族間で起こる憎しみなど、様々な憎しみがあ
るでしょう。

ですが、この世に憎しみしかなかったら、この世はとっくに滅びています。憎しみにあふれるこの世は、同時に、人々の愛があるからこそ、完全な滅びに至ることがなく、何とか保たれているのだと思います。

そして、ニコラ・テスラのこの言葉「あなたの憎しみを電気に変換してしまいなさい。そうすれば世界全体が明るくなる」は、憎しみを単なる憎しみの次元のままにしておくのではなく、その憎しみを昇華し、それを電気に変え、世界全体を照らすような意識を持つことが大切なのだと思わされます。

本日の福音書には、イエスが語った「放蕩息子」のたとえが記されています。この「放蕩息子」のたとえにおいても、兄息子の憎しみと、それを包み込む父親の愛が語られています。

イエスは、このたとえ話を「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」とイエスを非難するファリサイ派の人々や律法学者に向けて語りました。

たとえ話の中に登場する父親には、二人の息子がいました。そのうちの兄は父の言いつけに従って真面目に働いていました。ですが弟は、そのような生活を嫌い、父から自分がもらうことになっている財産を欲しいと願ったので、父は財産を兄と弟の二人に分けてあげました。弟息子はそれを全部お金に換えて遠い地に行き、放蕩の限りを尽くして、父がせっかく与えてくれた財産を使い果たしてしまいました。

そんなとき、旅先で酷い飢饉が起こり、弟息子は食べるものにも困るようになりました。彼はどんだの苦勞をした挙句、初めて我に帰りました。ハッと目が覚めたのです。

そして、これまでの自分の罪を悔いて、父親のもとに戻ることを決意しました。弟息子が父親の家に帰って行ったとき、父親は彼を見つけて駆け寄り、温かい愛情を込めた挨拶をもって迎えました。弟息子が家を去った日から、彼を思いやり、その生活の破綻を予想し心を痛め、帰宅を切に願っていた父の愛ゆえに、遠くからでも我が子であることを知ったのでしょう。弟息子は勝手なことをした罪を心から悔いて、詫びました。もうあなたの息子と呼ばれる資格はありません、という言葉は、彼の悔い改めの心を表しています（ルカ 15:21）。

それに対して父親は何も言わず、弟息子の破れた衣服を最上の着物に替えさせ、手に指輪をはめさせ、足に新しいはきものを履かせることを僕に命じます。そ

して食べて祝うために、肥えた子牛を屠ることも命じ、弟息子の帰宅を祝って、祝宴を催しました。父親は、死んだも同然の息子が生き返り、いなくなっていたのに見つかったことを心から喜んだのです。

その時、畑にいた兄息子が家に近づくと、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきました。兄息子は僕の一人に事情を聞き、弟が帰って来たことで父が喜び、祝宴が催されていることを知りました。

兄息子の怒りは爆発します。怒った彼は、家に入ろうとしませんでした。

これまで父親に対して従順に仕えて来た兄息子が、今度は、家と父親を拒絶します。そんな兄息子を、父親は家から出て来てなだめました。先ほど弟息子に走り寄って出迎えた父親が、今度はここで祝宴を抜け出て、兄息子を出迎えています。

この件で、兄息子は、父親にも弟にも深く心を閉ざします。弟が自分の兄弟であることを拒否して父に「あなたのあの息子」と言い、大きく距離を取ります。それを父親が「お前のあの弟」と言い直し、兄息子に、お前のあの弟の帰りを一緒に喜んでほしいと願いました（ルカ 15:32）。

この時、父親は、兄息子への愛も伝えました。「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ」と言ったのです（ルカ 15:31）。

父親は、二人の息子がただでなく、二人の息子を愛していたのであり、二人を出迎え、二人に対して寛容でした。人間社会での一般的な考え方は、勝者がいれば敗者がいるというものです。しかし、神の愛は「両方どちらにも」向けられるものであって、「どちらか一方に」だけ与えられるものではないのです。弟を受け入れることは、兄を拒絶することではありませんでした。

人間にはどうしても、自分だけが愛されたい、自分だけに目をかけてもらいたいという気持ちがあります。しかし、神の愛はすべての人に向けられるものであることを、私たちは広い心をもって知ることが大切です。

旧約聖書 オバデヤ書 1 章 12 節にこうあります。「兄弟が不幸に見舞われる日に／お前は眺めていてはならない」。

もう 3 月も終わりになりました。

私たちの人生において、あんなに頑張ったのに報われなかった、心が傷つく結果で終わったと感じさせられることがあると思います。

こんなことなら、初めから何もしなければ良かったと後悔することもあるかもしれません。

ですが、自分が頑張ったことに対して、直接的には報われなかったり成果を出すことができなかつたとしても、その頑張りは、のちに他のことで必ず報われると信じてください。

そして自分自身に「あんなに頑張ったんだから、絶対に報われるよ」「絶対にいいことがあるよ」と声に出して語りかけてみてください。

オバデヤ書 1 章 15 節にこうあります。「主の日は、すべての国に近づいている。お前がしたように、お前にもされる。お前の業は、お前の頭上に返る」。

私たちは、どんな試みの中にいる時も、その奥にある神の御心と愛と共に、この世界に微笑みを向け続けましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。いつも私たちを愛し、私たちと共にいてくださることを感謝いたします。あなたの慈しみ深い愛によって、この世を愛と光で満たしてください。救い主 御子イエス・キリストによって祈ります。アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 ヨシュア記 5 章 9 節—12 節（新共同訳）

⁹ 主はヨシュアに言われた。「今日、わたしはあなたたちから、エジプトでの恥辱を取り除いた（ガラ）。」そのために、その場所の名はギルガルと呼ばれ、今日に至っている。

¹⁰ イスラエルの人々はギルガルに宿営していたが、その月の十四日の夕刻、エリコの平野で過越祭を祝った。¹¹ 過越祭の翌日、その日のうちに彼らは土地の産物を、酵母を入れないパンや炒り麦にして食べた。¹² 彼らが土地の産物を食べ始めたその日以来、マナは絶え、イスラエルの人々に、もはやマナはなくなった。彼らは、その年にカナンの土地で取れた収穫物を食べた。

新約聖書 コリントの信徒への手紙 二 5 章 16 節—21 節（新共同訳）

¹⁶ それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。¹⁷ だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。¹⁸ これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。¹⁹ つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。²⁰ ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。²¹ 罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。

教会讃美歌 202 番「東の空」、73 番「主はわが隠れ家」、199 番「主よいま去りゆく」。